

ウムラの形

[日本語]

صفة العمرة

[اللغة اليابانية]

ムハンマド・ブン・イブラーヒム・アツ＝トウワイジリー

محمد بن إبراهيم التويجري

翻訳者: サイード佐藤

ترجمة: سعيد ساتو

校閲者: ファーティマ佐藤

مراجعة: فاطمة ساتو

海外ダアワ啓発援助オフィス組織 (リヤド市ラブワ地区)

المكتب التعاوني للدعوة وتوعية الجاليات بالربوة بمدينة الرياض

1429 – 2008

islamhouse.com

⑦ウムラの形

- ウムラに臨む者がミーカート¹を通過する場合、そこでイフラーーム²に入ります。もしミーカートの内側からウムラに臨むのであれば現在いる場所からイフラーームに入りますが、マッカの住民であれば一旦タンイーム³などの聖域外に出てからイフラーームに入ります。昼夜に関わらずマッカに入る際には高い場所からそうすることが望ましく、出る際には可能ならば低い場所から出るようにします。また聖域内に入った時点で、タルビヤ⁴を唱えるのをやめます。
- ハラーーム・モスクに到着したら、ウドゥー⁵のある状態のままそこに入ります。そして黒い石のある柱から始めて、カアバ神殿をタワーフ⁶します。その際、神殿が自分の左側になるようにします。
- タワーフする前に、上半身に纏っている布の真ん中の部分を右上の脇下に入れ、布の両端を左肩上で留める形にすること - こうすることで右肩が顕わになります - は、スenna⁷です。そしてタワーフを終えるまで、この状態を継続します。
- また、タワーフの最初の**3**周を早足で行い、残りの**4**周は普通に歩いて完遂することもスennaの**1**つです。上記の右肩を顕わにすることと、最初の**3**周を早足で済ませることは男性のみに対して、かつタワーフ・アル＝クドゥーム⁸とタワーフ・アル＝ウムラ⁹のみにおけるスennaです。
- タワーフを開始する際に黒い石のところに来たら、それに正面から向かって手で触れ、キスをします。もしそう出来なければ右手でそれに触れた後、その手にキスをします。もしそれが出来なければ、手に持っている杖などで触れ、それにキスをします。もしそれさえも出来なければ、右手でそれを指すだけに留め、その手にキスすることはありません。そしてタワーフを開始したら歩き続け、途中で停止したりしません。そして黒い石の前

1 訳者注：詳しくは「②ミーカート」の項を参照のこと。

2 訳者注：詳しくは「③イフラーーム」の項を参照のこと。

3 訳者注：「タンイーム」とはマッカ北部の聖域境にある地名のことです。マッカ中心部からは約**7**キロ離れています。

4 訳者注：詳しくは「③イフラーーム」の項を参照のこと。尚**4**大法学派の見解では、ウムラの場合タルビヤを唱えるのをやめるのはタワーフ開始時です。

5 訳者注：イスラームにおいて定められたある一定の形式における、心身の清浄化を意図した体の各部位の洗淨。

6 訳者注：「タワーフ」は巡礼（ハッジとウムラ）の諸義務行為の内の**1**つ。アッラーを崇拝するためにカアバ神殿の周囲を**7**回逆時計回りに廻ります。

7 訳者注：預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の示した手法や道のこと。ムスリムは可能な限り、彼のスennaを踏襲するべきであるとされています。

8 訳者注：キラーン、あるいはイフラーードのハッジをする者がマッカに到着した際に行うタワーフのこと。根幹的行為でも義務行為でもなく、スennaです。

9 訳者注：文字通り、ウムラの際の根幹的行為としてのタワーフのこと。

を通るたび、毎週**1**回「アッラーフ・アクバル¹⁰」と唱えます。タワーフ中は各々望みのドゥアー（祈り）をし、アッラーをズィクル（念唱）し、タハリール¹¹します。

- そして毎週イェメン柱¹²の前を通るたび、そこを右手で触れます。その際タクビール¹³はせず、キスしたりもしません。もし触れるのが困難な状況であれば、タクビールも手で柱の方を指す仕草もせず、ただそこを通過します。そしてイェメン柱と黒石の柱の間を通過する際に、こう唱えます： - 私たちの主よ、私たちに現世においてよきものと、来世においてよきものをお授け下さい。そして私たちが業火の懲罰からお守り下さい。、
（クルアーン **2** : **201**）このようにしてカアバ神殿の周囲を**7**周し、タワーフの際にはヒジュル・イスマーイール¹⁴の内側には入らないようにします。黒石のある柱を通過するたびにタクビールし、そうすることが可能であれば、それに触れ、キスします。また**2**本のシャーム柱（黒石のある柱とイェメン柱以外の**2**本の柱）には触れません。タワーフが終了したら黒石がある柱とカアバ神殿の扉の間にある場所に胸と顔、両腕をつけて至高のアッラーに祈ったり願い事をしたりすることも出来ます。
- タワーフが終わったら右肩を覆って元の状態に戻し、 - イブラーヒームの立ち所を、サラ（礼拝）の場とせよ。、（クルアーン **2** : **125**）と唱えつつ、イブラーヒームの立ち所¹⁵へと向かいます。
- もしそうすることが可能であれば、イブラーヒームの立ち所の後部で軽い**2**ラクアのサラ（礼拝）をすることがスナナです。もしひどい混雑などでそう出来なければ、ハラーム・モスク内のどこでそれを行っても問題はありません。**1**ラクア目のアル＝ファーティハ章の後に「不信仰者たちの章：**109**」を、そして**2**ラクア目のアル＝ファーティハ章の後には「純正章：**112**」を唱えることがスナナです。そしてサラの後に特別なドゥアー（祈り）をしたりはせず、速やかにそこを立ち去ります。またイブラーヒームの立ち所でのドゥアーも、根拠のない行いです。
- イブラーヒームの立ち所でのサラを終えたら、黒石の所へ赴き、可能であればそれに触れたりキスしたりすることがスナナです。

¹⁰ 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であるという意味が含まれています。

¹¹ 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

¹² 訳者注：カアバ神殿を逆時計回りに回った時、黒石のある柱の手前にある柱のこと。

¹³ 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

¹⁴ 訳者注：カアバ神殿の北面に接する半円形の壁。元来カアバ神殿の中に含まれていた部分であり、それゆえその壁の中は神殿内部と同様であると見なされています。

¹⁵ 訳者注：イブラーヒームがアッラーの命に従ってカアバ神殿を建設する際、その足場にしたと言われる台のこと。カアバ神殿からみて東側の、程近い場所にあります。

- それからサファアの丘¹⁶に赴きますが、そこに近づいたら、- 実にサファアとマルワ¹⁷は、アッラーのみしるしの1つである。ゆえにカアバ神殿へのハッジに詣でたり、ウムラを行ったりする者は、その周囲をタワフしても支障はない。そして自ら進んで（義務ではないイバーダや善行を）行う者は、よきものを得よう。実にアッラーは（どのような些細なことであっても）よくお報いになられ、全てをご存知のお方なのである。、（クルアーン 2：158）と唱え、「アッラーが始められたことにおいて開始します¹⁸」と言うことがスンナです。そしてサファアの丘に昇ったら、カアバ神殿の方に向かい、両手を上げて3回タクビールします。それから「ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ・ラー・シャリーカ・ラフ、ラフ＝ル・ムルク、ワ・ラフ＝ル・ハムド、ワ・フワ・アラール・クッリ・シャイイン・カディール。ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハダフ、アンジャザ・ワダフ、ワ・ナサラ・アブダフ、ワ・ハザマ・アル＝アハザーバ・ワハダフ（いかなる共同者もない、唯一のアッラーの他に真に崇拝すべきものはなし。そしてかれにこそ主権と全ての賛美は属し、かれこそは全能のお方である。唯一のアッラーの他に真に崇拝すべきものはなし。かれはお約束をご遂行され、そのしもべをお助けになり、そしてかれ御1人で不信仰の輩を壊滅させられた）¹⁹」と唱え、それからドゥアー（祈願）に勤しみます。そして前述のズィクル（「ラー・イラーハ・イッラッラーフ...」）を再び唱え、またドゥアーに勤しみます。それから3度目の前述のズィクルを唱え、またドゥアーに勤しみます。ズィクルは声に出し、ドゥアーは声を潜めて唱えるようにします。
- それから恐れ慎みつつ、マルワの丘に向けてサファアの丘を降ります。そして緑のシグナルのある地点まで歩き、そこに到達したら次の緑のシグナルまで速足で走ります。それから再びマルワの丘に向けて歩き、その間タハリール²⁰やタクビール²¹、ドゥアー（祈願）などに勤しみます。
- マルワの丘に到着したらそこに昇り、カアバ神殿の方に向かってサファアの丘でした同様のことをします。それからマルワの丘を折り、サファアの丘に向かって歩きます。そして走るべき地点にきたら再び走ります。このようにしてサファアとマルワの丘の間を3往復半し、終点をマルワの丘で迎えます。この「サアイ」の儀においては、途中で中断したりしないこと、身体が清浄な状態で行うことがスンナです。

¹⁶ 訳者注：下記の訳者注を参考のこと。

¹⁷ 訳者注：「サファアとマルワの丘」とは、マッカのハラーム・モスク内にある全長約400mの回廊を挟む2つの丘。「サファアの丘」から始めてその間を3往復半することは「サアイ」と呼ばれ、ハッジとウムラの根幹的行為の内の1つです。

¹⁸ 訳者注：クルアーンの句で「サファア」が「マルワ」より先に言及されている通り、「サファア」の丘からサアイの業を開始します、という意味であると言われます。

¹⁹ サヒーフ・アル＝ブハーリー（4114）、サヒーフ・ムスリム（1218）。文章はムスリムのもの。

²⁰ 訳者注：アッラーこそが唯一の主であり、真に崇拝すべき対象であることを唱念するための言葉。「ラー・イラーハ・イッラッラー」という言葉に代表されます。

²¹ 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

- タワーフとサアイは連続して行うことがスンナです。そしてサアイが終了したら、剃髪 - こちらの方がよりよいとされます - するか、あるいは頭部全体から均等に頭髪を切るかします。一方女性は指の第1関節位の長さだけ髪を切り、それでもってウムラの完遂とします。そしてイフラームは解除され、それと共に香水や婚姻の契約などのイフラームの禁止事項も全て解禁されます。
- 女性はタワーフとサアイにおいて男性と同様に行いますが、タワーフにおいては男性のするように最初の3周を早足で行わず、また右肩をはだけさせたりもしません。また、サアイで男性が走るべき区間においても走ることはありません。そして装飾品などを露にしたり、声を上げたり、男性の中に混じったりしてしまわないよう気をつけます。
- ウムラのイフラームの後に男がその妻と交わってしまったら、そのままウムラの儀を完遂しなければなりません。そしてその上で、性交ゆえに無効となったウムラを再びやり直す義務を課されます。尚タワーフとサアイの後、そして剃髪あるいは頭髪を切る前に妻と交わってしまった場合には、ウムラは無効となりません。ただ「損害による贖罪²²」が義務付けられます。
- タマツトゥ（ウムラを終えてからハッジに移行する巡礼形式）を行う者は、もしウムラとハッジの間の期間が短い場合、ウムラの際に頭髪を剃るのではなく切り、ハッジの際に剃髪することが望ましいとされます。
- タワーフ、あるいはサアイの最中に義務のサラ（礼拝）が始まってしまった場合、集団と共にサラします。そしてサラが終了したら、中断した地点から再び始めます。また最初の周からやり直すことはありません。
- **黒石にキスすることの法的見解：**

1ー黒石を通過する際にキスし、触れ、あるいは（手や杖などで）指し示すこと、及びタクビール²³することはスンナです。それゆえそうすることが困難な場合はそれを放棄し、通常通りタワーフを開始、あるいは継続します。

2ータワーフの際、あるいはタワーフを終えてサアイへと移行する前に黒石にキスし、触れることは、それが可能な者にとってはスンナです。一方タワーフする人たちをかき分けて迷惑をかけるのは許されることではありませんから、そのような場合 - 特に女性は - 黒石へのキスや接触を諦めた方がよいでしょう。というのも黒石に触れるのはスンナ（義務ではなく推奨された行為）ですが、人を害するのは禁じられているからです。ゆえにスンナを行うために禁じられたことを行ってはいけません。

²² 訳者注：詳しくは「④贖罪」の項を参照のこと。

²³ 訳者注：アッラーこそが最も偉大であり、それ以外のものは全て些少な存在であることを唱念するための言葉。「アッラーフ・アクバル」という言葉に代表されます。

3-カアバ神殿の黒石は楽園から地上に落ちた時、その色は乳よりも純白でした。それが黒く変色したのは、アーダムの子ら（つまり人類）が犯した罪のためなのです。もしその石が無明時代の様々な穢れに影響されていなかったら、それに触れたいかなる病人も癒されずにはいなかったでしょう。審判の日アッラーはその石を召集し、それは自らに真に触れた者を証言します。また黒石とイエメン柱に触れると、罪が免じられます。

● タワーフの徳：

タワーフを沢山行うことは、推奨された行いです。

ウバード・ブン・ウマイル（彼にアッラーのご満悦あれ）は、彼の父がイブン・ウマル（彼らにアッラーのご満悦あれ）にこう言うのを聞きました：^f「あなたが常々黒石の柱とイエメン柱に触れるのを見ますが、それはどういうわけですか？」イブン・ウマルは言いました：「私がそうするのは、アッラーの使徒（彼にアッラーからの祝福と平安あれ）がこう言うのを聞いたからなのです：「その**2**本の柱に触れれば、罪が免じられよう。」」（アッ=ティルミズィーとアフマドの伝承²⁴）

- 清浄な状態でタワーフする方がよりよく、かつ完全でしょう。小さな穢れ²⁵の状態でもタワーフしても有効ですが、大きな穢れ²⁶の状態である場合はそれを清めなければなりません²⁷。

²⁴ 真正な伝承。スナン・アッ=ティルミズィー（959）、ムスナド・アフマド（4462）。文章はアフマドのもの。

²⁵ 訳者注：「小さな穢れ」とは、排便、放屁、熟睡や失神や酩酊などによる一時的な分別の喪失などによって陥る状態のことです。

²⁶ 訳者注：「大きな穢れ」とは、精液の発射、性交、月経や産後の出血などによって陥る状態のことです。

²⁷ 訳者注：4 大法学派は、タワーフにおいて「大きな穢れ」のみならず「小さな穢れ（排便、放屁、熟睡や失神や酩酊などによる一時的な分別の喪失などによって陥る状態のこと）」からも清浄であることを義務付けています。